

==人間と自然に関して==

包摂（ほうせつ、subsumption）とは、経済・社会が、その本来の諸関係にとって外生的な存在を取り込む過程をいう。K・マルクスは「直接的生産過程の諸結果」において、「労働の形式的・実質的包摂」としてこの用語を最初に用いた。後にこの用語は、労働（技術）以外の外生的な要素を取り込む場合の概念へと拡張された。経済・社会は、自然科学の法則を合目的的にシステム化した技術によって、生物としての人間、自然環境、空間などのさまざまな外的な存在を取り込まないと存続できない。これらはいずれも、自然的存在であって、それぞれが独自の運動法則をもつ統一体である。経済や社会は、このような自然的存在のうち有用な性質だけを取り込んで（包摂して）利用・活用しようとするが、自然は統一した全体として存在しているので、有用な性質の包摂は、同時に、経済・社会にとって障害となる要素も同時に取り込まざるを得ない。その結果、この障害となる要素が、経済・社会にさまざまな否定的結果をもたらす。これが、経済・社会にとって外生的なものの形式的包摂(formal subsumption)である。そこで経済・社会の主体である人間は、自然に障害を与えないよう自然を作り変えなければいけない。これは経済・社会による人為的な自然の生産過程である。人為的自然が適切に生産されれば、形式的包摂に際して存在していた障害はなくなる。これによって経済・社会は、外生的な自然を実質的包摂(real subsumption)したことになる。

○資本のもとへの労働の包摂：＜形式的従属（包摂）＞から＜実質的従属（包摂）＞へ。

「労働者がただ自分の労働力の価値の等価だけを生産した点を越えて労働日が延長されること、そしてこの剰余労働が資本によって取得されること——これは絶対的剰余価値の生産である。それは、資本主義体制の一般的な基礎をなしており、また相対的剰余価値の生産の出発点をなしている。この相対的剰余価値の生産では、労働日ははじめから二つの部分に分かれている。すなわち必要労働と剰余労働とに。剰余労働を延長するためには、労賃の等価をいっそう短時間に生産する諸方法によって、必要労働が短縮される。絶対的剰余価値の生産はただ労働日の長さだけを問題にする。相対的剰余価値の生産は労働の技術的諸過程と社会的諸編成とを徹底的に変革する。だから、相対的剰余価値の生産は、一つの独自の資本主義的生産様式を前提するのであって、この生産様式は、その諸方法、諸手段、諸条件そのものとともに、最初はまず資本のもとへの労働の形式的従属（包摂）を基礎として自然発生的に発生して育成されるのである。この形式的従属（包摂）に代わって、資本のもとへの労働の実質的従属（包摂）が現われるのである」K・マルクス『資本論、第1巻第2分冊』（大月書店、1968年）原書 532 頁。

だから自然とは原始・原生的な状態あることを言うのではなく、自然に障害を与えないよう作り変えられた結果としての自然、すなわち人為的・実質的包摂された自然を言うのである。こうした例として、日本全国にある棚田や散居村、溜池・農業用ダム、灌漑用水などは、自然の実質的な包摂としての自然であって、「水と緑の日本の原風景」を作り出している。人間と自然との調和が作りだした癒しの空間といえよう。



丸山千枚田

熊野古道の山深く

三重、奈良、和歌山三県の県境の

丸山千枚田は日本の棚田の代表ブランド

朝、雲海に映え夕に入り日を映し

美しい広がり と丹念な石積みは

四百年を超える先人の歴史を綴る

けれどこの棚田が今の姿に戻るまでには

町と住民の懸命な努力があった

かつては人口一万人だった村が

いま千七百人

二千二百四十枚あった水田も

気がついたら五百五十枚

荒れ果てた村を救えと住民は立ち上がり

十数年をかけ

千三百四十枚にまで復元した

日本を代表するこの棚田の村は

高齢化でも日本一

これが日本の山村の実態である

(二〇〇五年六月)

富山和子『水と緑，日本の原風景』（家の光協会，2008年）33頁。



はくすい

白水ダム

日本はたぐい稀な溜池の国
その伝統を受けて明治以降も
美しいダムが造られた
見事な曲線を描いて流れ落ちる
この小さなダムは
昭和十三年（一九三八年）完成の
農業用ダム
高さ約十四メートル、堤長九十メートル
貯水容量六十万トン、表面は石張りの

重力式コンクリートダム

地盤の悪さを克服し
水の落下速度を弱めるよう
設計者小野安夫氏が独特の技術をこらし
高い美意識をも結実させた
ダムの芸術品、溜池の女王
一九九九年、国の重文に指定された
（二〇〇〇年五月）富山和子『水と緑、日
本の原風景』（家の光協会、2008年）24頁。



散居村
屋敷林を巡らした農家が
百メートルおきに建つ
その数約一万戸
砺波平野は日本一の散村だ
田植え時
家々は一面の水面に浮かび

庄川に養われたこの豊かな大地は
奈良時代から都を養ってきた
先進地だ

（富山県砺波平野）富山和子『水と緑の国，
日本』（講談社，1998 年）32—33 頁。

富山和子の本は素晴らしい本です。ぜひ見て読んでください。